

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 申命記 34：1～12
2026年7月18日(土)

◆文脈と言葉

- 32 章（モーセの歌）： 民のこれまでの不信仰の指摘とこれからの背信を預言として厳しく警告しつつも、最終的には主がご自分の民を憐れみ、贖いを成し遂げてくださるという神の変わらない憐れみによる救いを歌います。
- 33 章（祝福の言葉）： 約束の地を目前にしたイスラエルの各部族に対して、主こそが彼らの避所であり盾であるという神の尽きない慈しみと恵みを力強く宣言し、民を祝福しています。
- このモーセの遺言を受けて、34 章ではモーセの最期の時が語られます。

◆あらすじと黙想のヒント

- 1-4 節：ネボ山のピスガの頂から、眼下に約束の地を見下ろします。けれども、犯した罪のゆえにモーセ自身はそこに行くことができないことが再度語られます。
- 5-8 節：モーセの命は尽き、モアブの谷に葬られます。死の際まで、その目はかすまず、気力も衰えていませんでした。最期の時まで主が守られたのです。主ご自身が彼を葬られますが、その墓の場所は今日に至るまで誰も知りません。イスラエルの民はモアブの平原で 30 日間、彼の死を悼んで泣き叫びました。
- 9 節：ヨシュアがモーセの跡を継いで民を導きます。ここに新しい時代が始まりました。
- 10-12 節：このあと、モーセのような預言者は二度と現れません。主が顔と顔を合わせて選び出された唯一の預言者であり、神は、エジプトからの脱出のためにあらゆるしるしと奇跡をモーセに行わせました。イスラエルの民に対しては神はモーセに力を与えて導かせました。
- 出エジプトを実現し、律法民に与えたモーセは約束の地を前にして生涯を終えます。モーセが約束の地に入れないのは、罪のままだでは神の国に入れないということです。それは人間の功績や律法の行いによって神の国に入るのではないことも示しています。私たちは、モーセが仰ぎ見た約束の地の完成を、ただイスラエルの新しい指導者（ヨシュアという名は新約聖書では「イエス」の十字架と復活による無条件の恵み、そして贖いの確かさの中に受け取るのです。